

〈死刑〉とは何か——？

死刑について考えると、命について、社会について、国家について考えること



死刑 映画週間Ⅲ

2020年5月8日(金)～5月14日(木)
京都みなみ会館

- 8日(金) 『激怒』(フリッツ・ラング、1936) × 石塚伸一(龍谷大学法学部・刑事法)
- 9日(土) 『A2 完全版』(森達也、2015) × 森達也(作家、映画監督)
- 10日(日) 『フォンターナ広場』(M.T.ジョルダーナ、2012) × 伊藤公雄(京都産業大学
現代社会学部、政治社会学、イタリア近現代政治史)
- 11日(月) 『教誨師』(佐向大、2018) × 大道寺ちはる(大道寺将司くんと社会をつなぐ
交流誌「キタコブシ」発行人)
- 12日(火) 『激怒』× 高山佳奈子(京都大学法学部・刑事法)
- 13日(水) 『教誨師』× 浅野献一(日本キリスト教団室町教会牧師)
- 14日(木) 『フォンターナ広場』× 伊藤公雄

「死刑映画週間III」開催にあたって

国連加盟国の7割以上で死刑が廃止・停止される中で、日本では「国民」の8割が死刑存置を支持、途切れる事なく執行が続いている。究極の権力行使にもかかわらず、日本ではほとんど情報公開されないこの「死刑」という制度を「映画」という虚構で可視化したい、これが私たちの思いです。

芸術作品が与えてくれるのは、「答え」ではなく、「問い合わせ」だと思います。同じ場で作品を観て、ゲストの話を聞き、死刑を取り巻く多様な問題、「国家による殺人は許されるのか」「償いとは何か」「命とは」などについて、理性で考え、対話する空間をつくりたい。それは、とかく一方向に——それも敵意や憎悪を燃料にして——流れやすいこの社会の精神風土に対する、ささやかな異議申し立てでもあります。

● 激怒



5月8日(金)夜
5月12日(火)夜

1936年／米国／92分
監督:フリッツ・ラング
脚本:フリッツ・ラング、バートレット・コーマック
出演:シルヴィア・シドニー、スペンサー・トレイシー

ナチスを逃れて亡命したラングの渡米第1作

恋人の元に車を走らせていたジョー（スペンサー・トレイシー）は、道中の田舎町で少女誘拐犯の一人と間違えられて捕えられる。激怒した地元民たちは私刑を加えようと留置場に押しかけ放火、ジョーは命からがら逃げだすのだが……。

● A2 完全版



5月9日(土)昼

2015年／日本／131分
監督:森達也
製作:安岡卓治
撮影・編集:森達也、安岡卓治
出演:荒木浩
(C)「AJ」製作委員会

信者たちの目に映る「この社会」とは

教団内部からオウム真理教信者たちを捉えた異色作『A』の続編。今回は公開時（02年）に諸般の事情でカットしたシーンを復活させた完全版を上映する。オウム真理教による一連の事件では、2018年7月、麻原彰晃氏ら教団幹部13人が執行された。

● フォンターナ広場



5月10日(日)昼
5月14日(木)夜

2012年／イタリア／129分
監督・原案・脚本:マルコ・トゥリオ・ジョルダーナ
出演:ヴァレリオ・マスタンドレア
(C)2012 Cattleya S.r.l. - Babe Films S.A.S

実際の事件を題材にした社会派サスペンス

1969年12月12日、ミラノのフォンターナ広場近くの農業銀行が爆破され、多数の死傷者がいる。捜査当局はアナキストの犯行と断定、次々と被疑者を拘束していくが、ある出来事で事態は一転する。

● 教諭師



5月11日(月)夜
5月13日(水)夜

2018年／日本／114分
監督・脚本:佐向大
エグゼクティブプロデューサー:大杉漣、狩野洋平、押田興将
出演:大杉漣、玉置玲央、烏丸せつこ、五頭岳夫、光石研
(C)「教諭師」members

名脇役、大杉漣 最後の主演作

牧師の佐伯（大杉）は死刑囚の教諭師。執行を待つ者と対話し、彼らの「改心」を促す存在だが、奥底に葛藤や苦悩を抱えている。佐向監督は、やはり死刑を正面から描いた『休暇』（門井肇、2007年）の脚本も手掛けた。

※上映時間は、京都みなみ会館HPでご確認頂くか、劇場にお問い合わせください。

〈当日料金〉

一般1500円／会員・学生1000円
シニア1100円／高校生800円

〈前売料金〉

1枚1300円／2枚2400円
3枚以上1000円×枚数

